

# 「ヴァインヘーバーの場合」について

日 名 淳 裕

## 1. 「ヨーゼフ・ヴァインヘーバーとその遺言」

いわゆる戦後オーストリア文学が始まった時期に、「ヴァインヘーバーの場合 (Der Fall Weinheber)」と呼ばれる一連の文学論争が起こったことは有名だ。この論争の中心にあった、文学者の戦争責任という問題が、直接的であれ間接的であれ、戦後オーストリア文学の展開に少なくない影響を与えてきたことは事実である。しかし、よく知られている割に、この論争の内容を詳細に論じた研究は少なく、スキャンダラスな論争が暴き出した戦後オーストリアに内在する矛盾の根について熟考した研究もまた少ない。<sup>1</sup>

詩人ヨーゼフ・ヴァインヘーバー (Josef Weinheber 1892-1945) をめぐると一連の論争の契機となったのは、1947年に遺稿詩集『ここに言葉がある (Hier ist das Wort)』<sup>2</sup>が出版されたことであった。時を同じくして、雑誌『トゥルム (Der Turm)』に「ヨーゼフ・ヴァインヘーバーとその遺言 (Josef Weinheber und sein Testament)」<sup>3</sup>という論文が発表された。それは以下のように始まっている。

イギリスから私たちに意見が届いた。「どうして君たちはヴァインヘーバーについて沈黙しているのか」、という非難である。そのとおり、どうして私たちは沈黙しているのか。<sup>4</sup>

この読者への問いかけは『トゥルム』(1947年第5/6号)の特集テーマ「英国」に対応したものだ。カトリック系保守であるオーストリア文化協会の機関誌『トゥルム』は、戦後にオーストリア・アイデンティティ

をめぐる問いを様々な観点から提起した。当該号も単純に占領国の文学を紹介するものではなく、それを通じてオーストリア人の自己同一性を際立たせることを目的としている。その巻頭にヴァインヘーバーに関する論文が掲載された。ここには同じように戦争責任を批判されていた『トゥルム』編集部の意図がある。戦争が終わって二年たった時期に、ナチスの桂冠詩人ヴァインヘーバーを議論の対象としながら、自分たちについての弁明を図ったのである。これがこの論争が一人の詩人の評価にとどまらなかった理由であり、また曖昧なままに立ち消えていった理由でもある。<sup>5</sup>

論文は遺稿詩集第六章のタイトル「告白 (Das Bekenntnis)」に読者の注意を促し、以下のように解釈する。

この詩集の九つある章の六番目は「告白」と題されている。そこには、他の章におけると同様に、疑いなく彼が死を決意したのちに書かれた数篇の詩が収録されている。そこではこの決意の仕方についての最後の迷いが消えている。もし、今日なお、耳を貸さない者らのうちの誰かが、ヴァインヘーバーはかつて「然り (Ja)」と言った、ということを引き合いに出すならば、ここに残された遺書を知るがよい。<sup>6</sup>

「かつて「然り」と言った」という表現は、ヴァインヘーバーが1938年にオーストリアのナチスドイツへの併合を歓迎したことを指している。さらに、早くから進んでナチスに入党し、それによって成功を収めたヴァインヘーバーの人生を非難する言い回しでもあった。論文は遺稿詩集に見られる詩人の「告白」を証拠として、今なおそのように詩人を解釈する者を頑迷固陋であると断ずるのだ。つづけて六連からなる詩「五十歳で (Mit fünfzig Jahren)」<sup>7</sup>が引用される。この長い詩には、戦争が終わる前の1942年における詩人の「洞察」が記されていると言うのだ。さらにその「洞察」を読む今、『トゥルム』が沈黙することなど何

もない。しかし言うべきことは多々あるとされる。<sup>8</sup> この詩の第二詩連を見てみよう。

私の自我へと産みこまれ、  
私は真正にあるほかなかった。  
しかしこの世界は恐ろしく  
逆らい身をもたげた、血まみれの反照とともに。

いま私はここに立つ、葉を落とされ、無気力にされ、榮譽を奪われ。  
そして時代は、時代はそれについて何も  
罪を負わなかつただろうか。時代がどのように身を守ることか！  
時代は遠ざかり、錯覚から自由であると宣言する—

しかし私は、私一人のために、私の「榮譽」を  
それでもなお耐え抜かねばならない。かつて一度として一人がそんな  
民族であったことはない。そして民族とは忍耐性であり、  
私はこの民族が生んだ一人の耐え忍ぶ者である。

時代は私から何を求めるのか？私に報酬は与えられたか？  
権力は私を讃えた、しかし尋ねはしなかった。  
それゆえ爛れた傷口が塞がることは決してない。  
そして私が語ったすべては語られないままである。<sup>9</sup>

「告白」と題された章に含められたことから、ここではシンプルな「私 (Ich)」を詩想の出発点として読むことが求められる。その「私」に「世界」と「時代」が対立するところから抒情が生まれている。「世界」と「時代」を前にして「私」は無力で孤独であるという。さらにすすんで、「私」にとって不本意な状況になった責任の一端は「時代」にあるとされる。目を引くのは第三詩連の後半に三度用いられる「民族 (Volk)」

という言葉だ。とくに最初のもは揚格の位置から「民族」という一音節の語が連続して聞かれるように工夫されている (Volk und Volk)。このように感嘆の音 O を重ねながら、「世界」と「時代」を否定的に描く一方で、「民族」という語は「私」にとって肯定的なものに留まっているようだ。

この詩は 1942 年六月から八月にかけて書かれた。<sup>10</sup> どのような歴史的事件がこの詩の背景となっているのだろうか。しかし『トゥルム』にとっては、詩人がその名声の頂点にいた時期にすでにこのような嘆きの詩を書いていた事実のほうが重要なのだ。ナチスに迎合したとされるヴァインヘーバーが実は罪の感情に苛まれており、「自分の罪を死によって償う」<sup>11</sup> 決意がすでにここに表れていると見るからだ。

どのようにしてヴァインヘーバーが「然り」と言うに到ったのか、それが問である。どのような理由から、彼が自らを咎めたところの罪が生じているのか。

彼自身は時代を非難する。彼は苦痛と錯誤を非難する。どのような苦痛であり、どのような錯誤なのか。人間であることの錯誤である。「しかし人間であることが私の没落を辱める」。

ヴァインヘーバーが述べる人間であることとは人間性 (humanitas) ではない。それは哲学的に言えば、剥き出しの事実性への頹落 (die Verfallenheit an die bloße Faktizität) のことである。それは判断を伴わず、存在の意味への決断を伴わない。彼が「一歩一歩引き裂かれて生きた ("zerlebte Zug um Zug")」のは、「神であることと動物であること」の中間においてである。これ以外の何ものでもない。<sup>12</sup>

「人間であること」は「剥き出しの事実性への頹落」であり、神と動物の中間存在として引き裂かれて生きることである。これがヴァインヘーバーの罪であり、それは人間存在一般の罪となる。ここで論文が、ヴァインヘーバーがしばしばヘルダーリンに依拠したことを「奇妙な誤解」

として批判するのは興味深い。

彼がヘルダーリンを引き合いに出したのは奇妙な誤解によってであった。ヘルダーリンにとっては、動物であることはまったく耐えられないことであり、彼にとっての唯一の苦しみであった。彼が「自らの不幸に歩みを進める者はより偉大になる」と述べた意味において同じように棘でもあった。ヴァインヘーバーは自らの苦しみへと歩みを進めることはなかった。彼はそれを生きた。それを引き受けた。それに身を捧げた。<sup>13</sup>

さらにヘルダーリンの今日的意義はその「清らかさ (Reinheit)」にあるとし、ヴァインヘーバーと区別する。

ヴァインヘーバーは清らかさをただ夢としてのみ知っていた。彼は自らの深淵を、「低いもの」を、自ら苦しんだ魔的なものを讃えた。ヘルダーリンが詩を神的なものの布教として、神的なものに向けられた人間の永遠の呼び声という布教として理解したのに対し、ヴァインヘーバーにはただ「告白」があったのだ。<sup>14</sup>

さらに「告白」は以下のように説明される。

彼がしばしば語ったところの内なる「ねばならない (Muß)」は、彼をより高次の存在へと呼びかけはしなかった。動物に対する戦いへと、清らかさへと向かって呼びかけはしなかった。彼にとってはすべてが自分自身の表白となったのだ。<sup>15</sup>

この「告白」のもっている自己言及性とともによりヴァインヘーバーが再解釈されてゆく。

彼が神的であると理解したものは言語（die Sprache）であった。彼は言語に対して、自らそう名乗ったように「遅れてきた者」として、疑いようのない熱狂をもって忠実であった。彼にとって言語とは何であったのか。音楽、陶酔、起源、そして同時に意味であった。「われらの言語よ（Sprache unser）」と彼は祈ったのだ…

「初めに言葉（das Wort）があった」。すなわち言葉は言語以上のものなのだ。フェルディナント・エプナーにならえば言葉は「靈的」なのである。清められた言語。精神なのだ。<sup>16</sup>

ここにこの論文の思想の核がある。ヴァインヘーバーが詩人として一貫して問題としてきたものは「言語」であるという。「言葉」へと向かう「言語」を扱うことは自我を扱うことである。それゆえヴァインヘーバーは、「人に許された最高のものは自分自身について語ることであり」と考えた。<sup>17</sup>「言語化された罪は、そこで美しくされたことによって、免罪された」<sup>18</sup>。ここで「美しくされた」というのは、抒情詩が形式的完成を達成することであり、それを導く自我がどこまでも伸長したことである。

この、「集団（Menge）」を憎んだ、断固とした主観主義者は、生物学的国民性の熱狂によって心を奪われた。なぜならば彼が「民族（Volk）」と呼んだものが、言語という純然たる共同から神聖になると思われたからだ。彼の語彙には、良心、そう意識を前にすれば、はかない現代人のあらゆる曖昧な自己弁明がある。「時代」に罪があるのだ！

彼にとって、「真正なもの」と「最高のもの」の間にはただ一つだけ審級が存在した。すなわち「美しいもの」である。シラー的意味における美しいものではない。美しい響きの、剥き出しの感情の、神秘的陶酔の意味における美しさである。彼が書いた詩は、その言

語のために、純粋な美という意味において、滅びることはないだろう。<sup>19</sup>

かつてヴァインヘーバーが「然り」と述べた理由は、煩わしい「集団」の問題を解決するには、共通する言語の他に手段がなかったためだとされる。言語は美しくあることによって主観の罪を免じることができるのだ。彼の言語神秘主義を考慮すれば、もはや何者もヴァインヘーバーの政治的責任を指弾することはできない。

ヴァインヘーバーの苦しみは、それがただ彼自身のものであることを誇る。それはどんな関連付けも知らないのだ。他の人間への関係であれ、人間そのものへの関係であれ知らないのだ。なぜなら彼が呼びかけた神もまたただ彼のみにも属したのである。<sup>20</sup>

極端な主観主義は自我を超えた審級を許容できない。詩人ヴァインヘーバーが熱心に献身したもう一つのテーマが言語そのものの探求であったのも驚くことではない。<sup>21</sup> 醜い「集団」の存在は、神的な言葉へと至ることを目指す絶対的自我と相容れない。そこで美による救済が待望されるのだ。その手段は民族に共通する言語である。ヴァインヘーバーの「然り」はこのように詩的に説明された。

彼は、知覚よりも血を（「真実なもの！」）、責任よりも起源を評価することが多かったため、自らの誤りがすでに明瞭となったその最後の年のあいだ、彼に罪を負わせたであろう決断を実行することなく、錯誤のうちに彷徨ったのだ。そうだ、彼が死へと歩みを進めたとき、なおつねにこの世界における存続を、彼が理解したような、言葉の榮譽を考えたのだ。<sup>22</sup>

論文はつづけて詩集の第五章「リズムについて (Vom Rhythmus)」から

「私がまだ生きていた時... (Als ich noch lebte...)」を引用する。その最終詩連は以下のようである。

神に捧げられた港によって語ることが  
私には許されている、そして言語はいま  
私にとって唯一無二のままである。死者らがそう  
はじめて純粹に言語を持ち、そこで  
賛美されるように。私はもはや  
他のものを求めはしない。ここに継続はある。ここではじめて  
私はたしかに私のものである。無骨な海賊の誰一人も  
もはや私の文をその場所からずらすことはなく、  
血はルビーに、涙はダイヤモンドになった、  
そして哀れな大地の表情から  
一つの天体が育った、日と夢を変容させつつ。  
誰が私のように生きたか？そして固い  
骨で世界の壁をノックし  
私のようにあらゆる時代に対して  
溢れるような権利を持ちえただろうか？私がまだ生きていた時、  
私は花々のもとへと行かねばならなかった。今や通り過ぎた。  
より高次の力から支配へと差し向けられ  
私はこの力の上に存続する。私は生き続ける。  
夜はあそこにあった。ここではない。ここに言葉がある。<sup>23</sup>

詩集のタイトルはこの詩の最終詩行に由来する。だからこの詩が詩集全体を要約するものだと見なすことができる。ヴァインヘーバーのもとで揺るがない語りの起点であった「私」がここではもう死んでおり、その人生を回想する形式で詩が展開してゆく。夜が訪れることがなく、「私」が「生き続ける」ことができ、言葉のある「ここ」という副詞が指すのは、生の世界の彼岸である。ここでもヴァインヘーバーは詩世界の現



実に対する優越を強調している。

ヴァインヘーバーが行き着き、そこで力尽きた縛れを、私たちはここで次のように解釈する。すなわち自我以上のものに対する自我の不遜であると。この世界のものではない掟に対する、血の、酩酊の、純然たる「真実性」と起源のもつ力—すべてこれら「内的なもの」—への狂信であると。私たちに使命、課題、克服、犠牲、慈善、愛、祈りとして委ねられた人間性に対する、純然たる人間的なものの屈伏であると。<sup>24</sup>

こうしてヴァインヘーバーの政治的誤りは、彼が詩人として神的なものに対して不遜であったことに、その原因があるとされた。詩人自身が嘆いたように、「時代」に急ぎ立てられて、本来神のみに委ねるべき事柄を自らの肩に担おうとしたのだ。そのような倨傲は、ギリシャ神話の英雄らのように、悲劇的結末を迎えるべく定められている。彼は自らの死でもって自らの罪を贖った。晩年の「告白」が出版された今、ヴァインヘーバーはこのように理解されねばならない。

ヴァインヘーバーは詩人であった。そして彼は詩人でありつづける。その功績に関わりなく与えられ、課された最後の意味まで測りえなかった恩寵ゆえに、彼は詩人でありつづける。<sup>25</sup>

## 2. 「ヴァインヘーバーをめぐる議論」

「ヨーゼフ・ヴァインヘーバーとその遺言」は戦後オーストリアの文壇に大きな反響を呼び起こした。そのため次号（『トゥルム』第7号）の巻頭には、「ヴァインヘーバーをめぐる議論（Debatte um Weinheber）」<sup>26</sup>というタイトルで、いささか弁明めいた続編が特集されている。冒頭で、前号の論文が提起した問いを、作者の「時代と時代に対する態度から、

過ちあるいはまさに罪を負わされた場合、どこまで文芸的なものは疑いなく文芸的なものとしてみなされるか」とまとめた。さらに、この問いへの答えとして提示されたものは、「あらゆる地上的なもの、人間的なもの、つまりまた政治的なものおよび文芸的なものに、宗教的なものが無条件に優越する」という考えに依拠していたという。<sup>27</sup> もちろんこの考えは自分たちと異なった視点を排除するものではない。ただし、このような問題提起をして、「精神に関することにおいては最も致命的で非生産的である沈黙」を打破したことには、まぎれもない『トゥルム』の功績がある。だからこそ「議論が継続されることが私たちの望みである」とする。

この前号の主張をかなり和らげた編集部の見解につづいて、六名の作家と二名の読者の意見が掲載された。そのなかにヴァインヘーバーの詩人としての功績を否定するものは見当たらない。前号の論文に批判的な意見の多くは、どのような場合も作品と作者を分けて考察することはできないという前提に基づいている。その例として作家エルンスト・ロータル (Ernst Lothar 1890-1974) を見てみよう。ロータルは、前号が引用したヴァインヘーバーの詩をあらためて引き合いに出し自説を展開している。

私が見る限りにおいて、国民社会主義詩人ヨーゼフ・ヴァインヘーバーの場合でも、他のすべての詩人の場合と同様に、この男とその作品を互いに引き離すことはできない。

例えばある詩行のなかでヴァインヘーバーが、「私に報酬は与えられたか?」と問うならば、彼はこの尊大な一詩行によって、この詩が与えうる高揚を消し去ってしまった。他の詩にある素晴らしい二詩行で、「半世紀ここにいること—それは十分に学校であった」と言うならば、それに先んずる二詩行「神であることと動物であること—私は一歩一歩引き裂かれて生きた」は、まさにフランツ・ヴェ

ルフェルから借りた言葉「引き裂かれて生きた」を用いたことによって、まったくひどい具合に台無しにされた。<sup>28</sup>

ロータルは、そもそも詩における私が実際の私から区別されることはないという考えに基づいており、ナチスに迫害されて亡命した詩人ヴェルフェルの詩語を安易に用いたことを強く批判している。見受けられる傲慢な作風がヴァインヘーバーの詩の価値そのものを減じていると言うのだ。

作家エトヴィーン・ロレット (Edwin Rollet 1889-1964) は、自発的ではないが、呼びかけられた以上は自らの態度を表明するのが義務であるという前置きをもって、『トゥルム』はむしろヴァインヘーバーについて沈黙を守るべきであったという独自の考えを展開した。

いま彼の死からたった二年の後に、あの時代がつけた傷口がなお塞がることなく、いわんや癒えることのない時期に、問いが投げかけられた。すなわち、私たちは「芸術作品を芸術家から分けることができるのかどうか」。これはまさに奇妙な問いではないか。一面において臆病であり、他方において尊大であるからだ。臆病であるというのは、あたかもあなたたちがヴァインヘーバーをいかなる状況においても欠かすことができないと考えているかのように疑わしくその問いが響くからである。尊大だというのは、私たちが距離を取ることができない作品について、あえて決定的な判断を下そうと試みるからである。『トゥルム』編集部諸氏よ、あなたがたはヴァインヘーバーを傑出した人物であるとみなす。私はそうはみなさない。それにしても、彼が何であったのか私たちが知っていると言っても言うのだろうか。二十年、いや五年のうちに人々が、もう来年には、ヴァインヘーバーの作品があらゆるプロパガンダの手段によって称揚され、叩き込まれることのなかった一人の若者が、彼についてどのように判断するのか、私たちは知っているだろうか。<sup>29</sup>

ロレットは、ヴァインヘーバーが詩人として野蛮なナチズムと結託し、あらゆる機会に自らの能力を發揮したという非難を前提としつつも、「ヴァインヘーバーの場合」は彼一人だけの場合ではありえないため、戦争に関わった世代がなお過去とこの詩人に対して距離をとりえない時期に性急にも、「芸術作品を芸術家から分けることができるのかどうか」という問いを立てること自体を批判した。そのうえでロレットはヴァインヘーバーを以下のように断じた。

この詩人には運命によって技巧的義務だけでなく、また精神的義務も課せられていた。ヴァインヘーバーは言語の巨匠へだけでなく、世界の精神的観想と認識へも招じられていたのだ。私たちは今日はっきりと、ヴァインヘーバーがこの二つ目の、より偉大な使命を十分に果たせなかったことを見てもいるし、知ってもいる。そして私たちの現在にとっては、どれほど強い技巧的業績も、この精神的倫理的不全を埋め合わせることができないのだ。そうでなかったならば、いかなる「ヴァインヘーバーの場合」もなかっただろう。しかしそれがあったからこそ、私たちは彼を私たちの精神と芸術生活から遠ざけておく権利だけでなく、義務をも有するのである。<sup>30</sup>

全体として中立的で議論の本質と対決することを避けるようなコメントが多い中で、ロータルとロレットの文章は質的にも量的にも際立っている。ロータルはヴァインヘーバーの批判を主としているのに対し、ロレットは『トゥルム』編集部の態度を問題視している。それでも、続編のタイトルに「議論」という言葉が選ばれているように、ここでは様々な意見を公平に紹介するにとどまっておき、先号の主張を克服することはもとより、ここに集められた異なった意見同士がぶつかりあうことすらなかった。

### 3. 「もう一度、ヴァインヘーバーの場合」

つづく『トゥルム』（第8号）には、「もう一度、ヴァインヘーバーの場合（Noch einmal: der Fall Weinheber）」というタイトルで、あらためて特集が引き継がれている。そこで、「1947年六月ウィーン」という日時とともに発表された編集部の声明は、二号にわたって繰り上げられた論争の経緯をふり返りつつ、自分たちの意図が理解されない葛藤を伝えている。

まったく見通せない沈黙、死の沈黙を打ち破ったという満足は、「ヴァインヘーバーの場合」の根底にある問題について、個人的なものや時代に拘束された人間的なものから離れて理解することが、やはりまだ時宜に適っていないという認識によって損なわれている。<sup>31</sup>

前号におけるロレットの批判を意識したこの件に、「私たちの意図は裁判を開くことにはあつたのではなく」、「私たちが投げかけた問いが目標としたのは、ヴァインヘーバーの場合のような何かある物事を起こさせた、より深い諸根拠について口を開くことであつた。それは理解とか教示を求めはしても、同じくらいに公正さを要求するものではなかつた」という弁明が続く。<sup>32</sup> そのうえで編集部の揺るがない確信をふたたび要約する。

美、言語、そして精神これらの力が、高度に物質的であるよう運命づけられた時代にあつてなお失われていないということが一つの根拠としてありうるし、私たちはそこから逃れるべきではない。<sup>33</sup>

さらにこの主張につづけて以下のような批判を付してもいる。

第三帝国のプロパガンダは、残念ながら今日まったく異なった党派によって、繰り返し論争の場で取り上げられている、あの忌まわしい信条をおぼえこまそうと試みた。すなわち、政治が第一であり、芸術を含む自余のものは政治に奉仕せねばならないというものだ。私たちは、政治が問題である限りにおいてこの優位の要請に抗うものではない。しかし、私たちのすべてが政治であるというような見解を拒否するのである。<sup>34</sup>

芸術の自律性をめぐる一連の論争の批判者が、偏った政治的志向の持主であると揶揄するような声明は、後に掲載されているフランツ・テオドール・チョコア (Franz Theodor Csokor 1885-1969) の文章が、この議論全体の結語となると述べて終わっている。つづいて、ハインツ・ポリツァー (Heinz Politzer 1910-1978)、エトヴィーン・ハルトル (Edwin Hartl 1906-1998)、チョコア三名の意見が掲載されているが、ポリツァーはヴァインヘーバーの政治的立場を保留にしたうえで作品そのものから看取される「根本的な異質さ」を説明しようと試みる。

私はヴァインヘーバーの作品は『高貴と没落』までしか知らないし、そこには大げさな言葉とわずかな音楽があっただけだ。しかし私は、とりわけ「高貴」と「没落」の間にある接続詞「と」に向き合った時に感じられた矛盾を克服することができなかった。高貴とはおそらく精神の要求を、内側から息づく形式という良質の選択を、沈黙した責任の身振りを意味するのだ。しかし、責任の中にある他人からの答えがこの詩人に与えられることはめったにない。たとえ彼が民族の理想像に身を向けたとしてもである。その理想像は彼の眼前に、いっそう劇的なかたちで現代の矛盾を披歴したのではあるが。彼は誠実であった。そしてそのためにすでに早いころから、与えられはしたが味わうことのできない榮譽のもとで寒気をおぼえていたのだ。それで彼は彼の言葉へと帰り語った。自分について語った。

しかし、そこには彼が愛において語りかけうるような人物は誰もいなかったのだ。そのために彼は、高貴と呼ぶ張りきった諸形式を没落と結び付けた。彼は没落を見た。そして後にはそれに憧れた。彼はそこに向かって歩み寄ることなくそれを実現させたのだ。<sup>35</sup>

さらに、ヴァインヘーバーの詩想を以下のように捉えている。

世界が彼に意味するところは少なく、世界は彼にただ、彼が自分自身を表現するために必要とする形象を提供したにすぎない。彼が呼び起こした共同性、彼がそこに依拠した諸連関、それらは彼にとって結局のところただのイメージであり、彼自身と彼を個別化するイメージを創り出すための手段にすぎなかった。言語形式を別にして伝統が彼に力を行使することは少なかった。この温和な力は、人という場において、結び付けては解き離すものなのだが。彼は自分を表現したが、発話の自我はまだ文にはならない。名詞に動詞と対象が欠けているのである。<sup>36</sup>

そのうえで、『トゥルム』（第5/6号）に掲載された詩をヴァインヘーバーの改悛の証として認めることはできないと言う。

もし彼が世界と人間への致命的な洞察を見出したときに、そしてその存在を贖罪として引き受け、生き続けていたならば、言葉の芸術家を「詩人」として公認させるような詩が生まれただろう。<sup>37</sup>

最後に掲載され、編集部によって結語と位置付けられたチョコアの長い文章では、ヴァインヘーバーの思い出とこの詩人の厳しい生い立ちの紹介に多くが割かれた。

ヨーゼフ・ヴァインヘーバーは自らの芸術のほか何も信じなかった。

そのもとで彼は、血の中に入ってくるワインのように酔いしれたのだ。そのとおり、彼はまさにその中に逃げ込んだのだ。彼の始まりを知っている世界から隠れるために。<sup>38</sup>

ヴァインヘーバーとの個人的な思い出を回想したり、彼の文学史におけるまぎれもない功績として、方言詩集『言葉のウィーン (Wien wörtlich)』に言及する点は、政治と文学を問うた論争そのものへの回答を避けた少なくない論者らに共通する傾向であった。これこそ今回の論争に対する最も一般的な態度であったと言えるだろう。『トゥルム』とは政治的立場が異なる雑誌『プラン (Plan)』を率いたオットー・バージル (Otto Basil 1901-1983) もその一人であった。<sup>39</sup> 戦後オーストリアの文壇をにぎわした「ヴァインヘーバーの場合」のもう一つの特徴は、それが『トゥルム』を離れてはほとんど広がりを見せなかった点にある。詩人エーリヒ・フリート (Erich Fried 1921-1988) によるバージルへの批判的提案に対して、バージルが用意したのは自分ではなく「若い世代 (Jugend)」の手になる短い声明「私たちとヨーゼフ・ヴァインヘーバー! (Wir und Josef Weinheber!)」であった。<sup>40</sup> その冒頭には1944年にヴァインヘーバーがウィーン大司教区学生指導者に宛てた手紙の中で、「ゲルマニアの栄光のために」自らの力を捧げたいと述べた一節が批判されている。その一方で、批判の矛先がヴァインヘーバーの具体的な作品に向かう様子は見られない。「若い世代」の主張は、ナチス時代に苦渋の生活を強いられた「テオドーア・クラマー、ヴィルヘルム・シャーボ、パウラ・ルートヴィヒ、ハンス・ライフヘルムについては今なお沈黙されている」のに対して、どうして今ヴァインヘーバーについて口を開くのかという、ロレットによる批判の二番煎じであった。<sup>41</sup> このように、一連の論争の中心にはヴァインヘーバーの作品そのものへの検討はあまりなく、このような事を企画した『トゥルム』編集部への不信が強くあり、それは議論の推移において変わることがなかった。もちろんヴァインヘーバーを超えて『トゥルム』編集部の具体的な誰かへと



批判が飛び火することもなかった。「ヴァインヘーバーの場合」はあくまで『トゥルム』という一雑誌における小さな事件という認識に落ち着いたのだ。ヴァインヘーバーは『トゥルム』が意図したようなナチズムに加担した知識人を救済するモデルケースとはならなかった。むしろヴァインヘーバーの文学的価値判断とともにオーストリアの文学者の戦争責任についても曖昧なままに終わらせる重石となった。まさにそのことによって、「ヴァインヘーバーの場合」は、矛盾に満ちた戦後オーストリア文学の出発を整えたのだとも言えよう。

注

- 1 私を知る限り以下の論考のみである。Daniela Strigl: Spurensicherung auf dem »österreichischen NS-Parnaß«. Otto Basil und die Debatte um Josef Weinheber. In: Otto Basil und die Literatur um 1945. Tradition – Kontinuität – Neubeginn. Hg. von Volker Kaukoreit und Wendelin Schmidt-Dengler. Wien (Zsolnay) 1998, S. 66-76.
- 2 Josef Weinheber: Hier ist das Wort. In: Ders.: Sämtliche Werke. Nach Josef Nadler und Hedwig Weinheber, neu herausgegeben von Friedrich Jenaczek. II. Band: Die Hauptwerke. 3., durchgesehene und veränderte Auflage. Salzburg (Otto Müller) 1972, S. 551-668.
- 3 Josef Weinheber und sein Testament. In: Der Turm (Jg. II. Nr. 5/6 1947), S. 169-172.
- 4 Ebd., S. 169.
- 5 有名な「ヴァインヘーバーの場合」というタイトルが用いられたのはこの論文が最初である。Josef Weinheber und sein Testament, S. 170.
- 6 Ebd., S. 169.
- 7 詩が書かれた1942年は、ヴァインヘーバーにウィーン大学から名誉博士号が授与された年であり、彼の成功の頂点であると目される。
- 8 Josef Weinheber und sein Testament, S. 169.
- 9 Ebd.
- 10 Weinheber: a. a. O., S. 789.
- 11 Josef Weinheber und sein Testament, S. 170.
- 12 Ebd., S. 170.
- 13 Ebd., S. 171.
- 14 Ebd.
- 15 Ebd.
- 16 Ebd.
- 17 Ebd.
- 18 Ebd.

- 19 Ebd.
- 20 Ebd.
- 21 Ebd., S. 172.
- 22 Ebd.
- 23 Ebd.
- 24 Ebd.
- 25 Ebd.
- 26 Debatte um Weinheber. In: Der Turm. (Jg. II. Nr. 7. 1947), S. 233-236, hier S. 233.
- 27 Ebd.
- 28 Ebd., S. 234.
- 29 Ebd., S. 234f.
- 30 Ebd., S. 235.
- 31 Noch einmal: der Fall Weinheber. In: Der Turm. (Jg. II. Nr. 8 1947), S. 265-267, hier S. 265.
- 32 Ebd.
- 33 Ebd.
- 34 Ebd.
- 35 Ebd., S. 265f.
- 36 Ebd., S. 266.
- 37 Ebd.
- 38 Ebd., S. 267.
- 39 Strigl: a. a. O., S. 66f.
- 40 Wir und Josef Weinheber! In: Plan. Kunst-Literatur-Kultur. Hg. von Otto Basil. (2. Jg. Nr. 3. 1947), S. 210-211.
- 41 Ebd.

# Über „den Fall Weinheber“

Atsuhiko HINA

Der im Jahr 1947 publizierte Nachlaßband Josef Weinhebers „Hier ist das Wort“ führte im Nachkriegsösterreich die bekannte Debatte um den Dichter und dessen politische Haltung in der NS-Zeit herbei. „Der Fall Weinheber“ fand seinen Ursprung in der Zeitschrift *Der Turm* (2. Jg. Nr. 5/6), die die österreichische Kulturvereinigung herausgab.

Parallel zur Publikation des Nachlaßbandes erschien dort ein Aufsatz mit dem Titel „Josef Weinheber und sein Testament“, in dem vorgeschlagen wurde, den in Ungnade gefallenen Dichter wieder zu enttabuisieren. Bei der Interpretation seines autobiographischen Gedichts „Mit fünfzig Jahren“ wurde darauf hingewiesen, dass Weinheber hier schon dichterisch seine Schuld eingestanden habe. Daher solle sein Freitod gegen Kriegsende als seine Sühne gesehen werden. Auch der Dichter sei als ein „Mensch“ unvermeidlich in der Zeit verwickelt, und es sei nur daraus zu erklären, warum Weinheber das Nazi-Regime befürwortete. Trotz seines politischen Wahns solle nicht verleugnet werden, dass Weinheber einer der größten Sprachkünstler seiner Zeit war. Beim Lesen seines Werkes solle man nicht die politischen, sondern die geistigen, religiösen Aspekte berücksichtigen.

Hinter dem Aufsatz „Josef Weinheber und sein Testament“ stand die versteckte Absicht, auch andere tabuisierte Schriftsteller zu rehabilitieren. Dieser Versuch wurde von manchen Autoren, die in der NS-Zeit zum Exil gezwungen wurden, stark verurteilt. Im nächsten Heft *des Turms* (2. Jg. Nr. 7) erschien der Artikel „Debatte um Weinheber“, der die Inhalte des ersten Artikels weitestgehend revidierte. Es wurde betont, dass das Ziel sei, dem Totschweigen des Dichters ein Ende zu bereiten. Deshalb berief er sich bei der Interpretation auf „das bedingungslose Primat des Religiösen über alles Irdische“. Wenn sich auch ein Dichter politisch falsch verhielte, solle er doch nur aus der religiösen Sicht beurteilt werden. Freilich schließe dieser Gedanke die anderen Meinungen

nicht aus. Die Redaktion hoffe auf eine Weiterentwicklung der Debatte. Nach dieser Proklamation wurden acht verschiedene Kommentare vorgestellt, die jedoch nicht viel mehr als ein einfaches Aufzählen von Meinungen waren.

Dennoch setzte sich die Debatte um den Dichter, wie erhofft, fort. Im nächsten Heft (2. Jg. Nr. 8) erschien der Artikel „Noch einmal: der Fall Weinheber“. Darin fasste die Redaktion dessen Verlauf zusammen und erklärte noch einmal ihr Ziel. *Der Turm* schlage hier noch einmal der Öffentlichkeit vor, „das dem „Fall Weinheber“ zugrunde liegende Problem über das Persönliche und zeitbedingt Menschliche hinaus zu verstehen“. Nicht „ein Gericht einzuberufen“, sondern „eine Aussprache über die tieferen *Gründe*, die so etwas wie den Fall Weinheber überhaupt entstehen ließen“, sei am wichtigsten. Dann kritisierte die Turm-Redaktion die in der Nachkriegszeit herrschende Ansicht, dass „die Politik über alles übrig den Primat habe“. Auch in „der Zeit der materiellen Verhängnisse“, solle stets die „Macht der Schönheit, der Sprache und also des Geistes“ überwiegend sein. Darauf folgten die Kommentare dreier Schriftsteller. Beispielsweise schrieb Franz Theodor Csokor darüber, wie er persönlich sich an Weinheber erinnert. Dabei vermied er behutsam die Frage zu beantworten, ob die Kunst eigentlich von Autor frei sein kann. Stattdessen betonte Csokor die Fiktionalität der Kunst, in die Weinheber stets aus der harten Wirklichkeit geflohen sei.

Diese Meinung teilten nicht wenige Kommentatoren. Otto Basil, der Herausgeber der linken Zeitschrift *Plan*, war auch einer davon. Angesichts der heftigen Debatte im *Turm* entfernte er sich davon und behandelte das Thema in *Plan* gar nicht. Basil publizierte stattdessen den kurzen Kommentar „Wir und Josef Weinheber!“, den junge Schriftsteller verfassten. Auch hier galt die Kritik nicht Weinhebers Werken, sondern dem *Turm*, der jetzt nach dem Krieg nicht über die Exilanten, sondern Weinheber zu sprechen versuchte. Wegen dieser Meinungsdivergenz wurde Weinheber weder enttabuisiert noch wesentlich kritisiert. Josef Weinheber wurde nicht zum Präzedenzfall, nach dem andere entschuldigt werden hätten können.